

研究ノート

## 明治期における『新約聖書』の日本語訳考

—“glory”と「栄光」を中心に—

河 合 勇 治

### はじめに

“glory”と「栄光」の関係について考えるに至ったのは、以下の詩を読んでからだ。

For in Christs Coach they sweetly sing,  
As they to *Glory* ride therein.  
Italic mine (Edward Taylor, “The Joy of Church Fellowship Rightly  
Attended” ll. 5-6)

キリストの馬車では、みんな楽しくうたうのだ、  
栄光に向けて進みながら。 下線引用者（亀井俊介訳）

何気なく雰囲気を読み飛ばしがちな翻訳である。しかし、この“glory”は「栄光」と訳されているが、これは天国のことであると指摘された。私はその時こういう意味が存在することを知らなかったので、驚きと同時に不可解な気持ちになった。それは日本語に対する疑問であり、細かくいえば訳語に対する疑問である。つまり、見慣れた漢字が2つ並んでいるので、安心して思考

が停止してしまっていることに気付いた。

それをきっかけに、「栄光」という単語に興味を持った。この言葉は現在日常会話でよく使われる。大抵の場合その使用にあたっては「榮譽」とか「名声」という意味を念頭においている。しかし、上記の詩の訳語のようにキリスト教の信仰にかかわる意味を持っていることを知って、その成立過程を見る必要を感じた。つまり、この単語は元々はキリスト教のために作られたのではないかと思ったわけである。そういうわけで、キリスト教の日本流入の課程を追い、「栄光」という言葉の起源を探ることにした。

そこで本研究ノートでは、“glory”という語の翻訳がどのような変遷を経て、今日使われている訳語「栄光」という訳語に至ったかを調べるために、以下のような方法を取った。まず、資料として幕末からの聖書の和訳と漢訳の聖書を収集し、その中で年代順に比較のできる新約聖書の四福音書を調査対象に限定した<sup>(1)</sup>。なぜかという、入手できる資料の関係と簡略化を計るためである。次に、新約聖書のコンコーダンス(*The Complete Concordance to The Bible, New King James Version*, Thomas Nelson Publishers, Nashville, 1983)で“glory”の使用されている箇所を調べ、和訳聖書と照合するための用例を拾い上げた。さらに、その用例を収集した和訳聖書の中から抜き出して、使用されている訳語を年代順に並べて考察した。加えて、J.C. ヘボン編『和英語林集成』(1867)から市河三喜編『大英和辞典』(1931)までの主要な英和辞典を活用して、“glory”がどのような訳語で説明されているか調べ、その用例を年代順に並べて考察した。

## 1. “glory”の意味について

“glory”とその訳語「栄光」について調査する前に、この語の持つ意味を把握し、意味を三つに分けることにする。なぜなら、この三つの意味の分類を軸にして、ばらばらに翻訳された四福音書を時間順に繋いでいくことになるからだ。本来ならば、「マタイ伝」ならば「マタイ伝」の同じ部分を軸にして、年代順に対照するのが普通だが、一次資料は殆ど稀覯本である上に、散

逸している場合も多く、この方法を貫くことは不可能であった。限られた資料でより客観的に全体を見ていくために、意味の分類を軸に、四福音書のそれぞれに該当する場所を特定し、全体を統一して、時間的な変遷を見ることにした。

まずは一般的によく使われる「名声」や「栄誉」「繁栄」の意味である。現在の『小学館プログレッシブ英和中辞典(第三版)』、『研究社新英和中辞典(第六版)』のような英和辞典、または、*Longman Dictionary of Contemporary English*(New Edition), *Collins Cobuild English Dictionary* (1995) のような英英辞典においては、この意味が最初に出ていることが多い。OED では1～4の用例にこの意味が当てられている。現在使われている訳語は辞書によって「栄光」や「光荣」「栄誉」などさまざまである。以下のように聖書にもこの意味の“glory”はいくつか見られる。

And yet I say unto you, That even Solomon in all his *glory* was not arrayed like one of these.

Italic mine (*King James Version* Matt 6:29)

しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。下線引用者(新共同訳マタイ福音書6:29)

1994年刊行の新共同訳ではこの“glory”に「栄華」という訳語が用いられている。

次に、「神の栄光」と説明される“glory”である。この用法をもう少し詳しく見ると、大きく二つに分類できる。まず、一つに宗教的な救いの根拠となるものを表わしている用法。OEDでは5～8の用例がこれに当たる。

*Glory* to God in the highest, and on earth peace, good will toward men.

Italic mine (*King James Version* Luke 2:14)

いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。

下線引用者（新共同約ルカ伝第2：14）

ここでは宗教的な救い、つまり、“glory”に至ることが究極の目的となるような場所あるいは状態がそれに当たる。

次に、「神の臨在」の具象化を表わす光を表わした“glory”というのがある。OED では9の用例がこれに当たる。

And then shall they see the Son of man coming in the clouds with great power and *glory*.

Italic mine (*King James Version* Mark 13: 26)

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々  
は見る。

下線引用者（新共同約マルコ伝福音書 13：26）

「人の子」とはイエスのことで、ここでは光に包まれたイエスの描写がなされている。つまり、目に見えないはずの存在である神を象徴的に示す光のことである。聖母マリアやキリストまたは聖人などを囲む光の輪のことを指すこともある。仏像などの背後にある「後光」を連想してみると理解しやすいかもしれない。

そういうわけで、1 キリシト教と関係のない、世俗の名声や栄誉を表わすもの。2 キリシト教における神への賛美や宗教的に救われた状態をあらわすもの。3 神やキリストなどが帯びている光や存在を表わす光。というふうに三つに分け、それぞれを「人間的」「栄光」「臨在」として、これを軸に翻訳語の変遷を見ていきたいと思う。

## 2. 訳語の検証

### 2.1. キリシタン時代の訳語について

西洋語の翻訳によって多くの新しい日本語が作られたわけだが、その本格的な翻訳は鎖国が解けた後である。しかし、キリスト教の流入は厳密にいうと、1549年（天文18年）のフランシスコ・ザビエルの日本上陸に端を発する「戦国時代」にさかのぼると捉えてよいだろう。そういうわけで、その時期の翻訳にも触れておきたい。

結論から言うと、本稿で注目する “glory”（この時代はラテン語の “gloria”）という単語は日本語に訳されずに、この語のラテン語の読みをそのまま平仮名に置き換えている。具体的な例を以下に挙げる。

みきよたりたまへと、此のころはあくじとつみをのがれ、Dとその御子 Jx よりげんせにおいてはがらさ、ごしょうにおいてはごろうりあをもてわれらをしんだいしたまへといふぎなり<sup>(2)</sup>。 （下線引用者）

下線の「ごろうりあ」はラテン語の “gloria” の読みをそのまま平仮名にしただけである。引用文は1600年長崎出版の『どちなきりしたん』を復刻したものである。それぞれ記号 “D” は「でうす」で “Jx” は「ぜずきりしと」を示している<sup>(3)</sup>。

原語の読みをそのままに、翻訳の為されていない用語は主にキリスト教独特の概念的な言葉がその対象になっていることに気づく。「ごろうりあ」もそうだが、上記の引用文に見られる「デウス」という言葉がある。この語に関してキリスト教宣教師としては、唯一で、創造主の人格神というものを理解させ、信仰させることが何より重要だと考え、彼らはこれを誤解させるような翻訳は避けたかった。そういうわけでこの語を「神」と訳すことができなかった。当時の日本人に対して「神」という訳語を用いると、原始的または

民間的俗信の一派と見られてしまう恐れがあったからだ。

## 2.2. 幕末から明治の新約聖書の翻訳

邦訳の新約聖書を検証するには、1813年の漢訳聖書『新遺詔書』の出版から、1880年の社中訳『新約全書』までが新約聖書翻訳の一つの区切りとなるであろう。社中訳は各派から派遣された翻訳委員によって合意の下に訳される共同訳で、以降その国の標準訳となるよう意図して為された仕事である。つまり、これは訳語の定着を意図しているといえよう。以下に示すのは年代順にそれぞれの意味における訳語を一覧にしたものである。

表 1

年	タイトル・訳者	マタイによる福音書				マルコによる福音書			ルカによる福音書			ヨハネによる福音書		
		6 : 29	16 : 27	19 : 28	24 : 30	8 : 38	10 : 37	13 : 26	2 : 9	2 : 14	12 : 27	1 : 14	7 : 18	11 : 4
		人間的	臨在	栄光	臨在	臨在	栄光	臨在	臨在	栄光	人間	臨在	人間	栄光
1813	『新遺詔書』 モリソン	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮
1837	『約翰福音之伝』 ギュツラフ											クライ	ジギ	クライ
1858	『路加伝福音書』 ベッテルハイム								栄華 (エイ グワ)	サカリ	栄華			
1863	『新約全書』 ブリッジマン・カ ルバートソン	栄華	榮	榮	榮	榮	榮	榮	栄光	榮	栄華	榮	榮	榮
1871	『摩太福音書』 コーブル	えい ぐわ	えい ぐわ	えい ぐわ	さかへ									
1872	『新約聖書馬可伝』 ヘボン					光明	御威光	光明						
1872	『新約聖書約翰伝』 ヘボン											榮き (たっ と)	判読 不能	判読 不能
1873	『路加伝福音書』 ベッテルハイム								えい ぐわ	さかへ	えい ぐわ			

1873	『約翰伝福音書』 ベッテルハイム											さかへ	さかへ	さかへ
1873	『新約聖書馬太伝』 ヘボン	榮	威光	判読 不能	光明									
1877	『新約聖書約翰伝』 社中訳北英国											榮(さ かえ)	榮(ほ まれ)	榮(さ かえ)
1879	『新約全書』 社中訳米国聖書	榮華	榮	榮	榮	榮	榮	榮	榮光	榮	榮華	榮	榮	榮
1880	『新約全書』 社中訳米国聖書	榮華	榮光	榮光	榮光	榮光	榮(さ かえ)	榮光	榮光	榮光	榮華	榮(さ かえ)	榮(ほ まれ)	榮(さ かえ)
1888	『新約聖書馬太伝』 社中訳北英国	榮華	榮光	さかえ	榮光									

1813年に『新遺詔書』, 1823年に旧約を含んだ『神天聖書』がモリソン (馬礼遜 Robert Morrison, 1782~1834) の訳によりマラッカにて刊行される。これは中国における教会主導の組織的な漢訳聖書出版の嚆矢である<sup>(4)</sup>。聖書の和訳を見ていく上でまず注目すべきことは、中国における聖書の翻訳である<sup>(5)</sup>。漢字を用いる文化圏という視点で考えれば、和訳の聖書は漢訳聖書の一つの支流にすぎないのである。年代順に見ても漢訳聖書は和訳聖書よりも早い時期に完成している。

さて、『新遺詔書』の訳語は上記の3つに分けた意味によって変化することなく、ほとんどが「榮」である。一つの例外は「即求自己之勞」(ヨハネ7:18)であるが、他に同じ例が見つからなかったので、ここでは誤植の可能性を指摘するにとどめる。

この後、1837年には、ギュツラフ (郭実臘 Karl Fredrich Augustus Gützlaff, LMS, 1803~1851) によって、和訳の『約翰福音之伝』がシンガポールにおいて刊行される。ギュツラフはモリソンやメドハースト (W. H. Medhurst, LMS) らと面識があり、彼らの仕事に触発される形で翻訳の作業にあたった。

ワタクシドモ ヒトノクライヲミタ (ヨハネ1:14),

ジシンカラモノユウヒト, ジシンノジギヲタヅネル (同7:18),  
 タダシゴクラクノ クライユエ, ゴクラクノムスコ ソレユエクライヲ  
 モラウ (同11:4) 下線引用者

この「クライ」という訳語と「ジギ」という訳語については、残念ながら手元にある資料ではその起源に辿り着くことはできなかった。推測の域を出ないが、早い時期なので中国の影響が大きいと思われる。

つづいて、中国において1850年に、モリソン訳の『新遺詔書』の改定として、『新約全書』が上海より刊行された。これはメドハーストを中心に、中国各地を代表する宣教師達が集まり会合を開いて作成された。この翻訳をもって中国における定訳と定められた。残念なことに、この資料は今回収集することができなかった。

一方、日本では、1858年にベッテルハイム(伯徳令 Bernard J. Bettelheim, 1811~1870) が香港で漢和对訳の『路加伝福音書』を大英国聖書協会から出版する<sup>(6)</sup>。ベッテルハイムは開国以前の日本布教に備えて、まず琉球に拠点をおき、1847年から1851年にかけて四福音書の琉球語訳を試みる。しかし、それが薩摩藩奉行所に知られ、1854年に一時香港に引き上げ、そこで本書を出版する。この聖書は和文と漢文が対訳で掲載されており、ここで使われている漢訳の部分は上記のメドハーストを中心とした委員による1850年出版の『新約全書』であるとされているが、メドハーストの『新約全書』を確認することができなかったので、照合して検証することは出来なかった。日本語訳の部分は片仮名中心で書かれており、所々漢字が混ざっているが、その横に振り仮名が付いている。

主之使者降臨, 主之光華環照, (漢訳の部分)

タチマチニ ヌシノ マサシキ ツカイ コレラニ クダリテ, ヌシ  
 ノ栄華 (エイグワ) カコミ テル (和訳の部分 括弧内は振り仮名)

(ルカ2:9) 下線引用者



ここで用いられている「榮華」は、現在の新共同新訳においては人間的な榮華、つまり、現世における成功という文脈で用いられている。漢文訳の「光華」のほうが適しているように一見思えるが、この段階においては、いずれにしても訳語が流動的であるといえる。

つづいて、アメリカ人宣教師ブリッジマン (E.C. Bridgman, ABCFM) がカルバートソン (M.S. Culbertson, NP) とともに漢訳聖書『新約全書』(1861)、『旧約全書』(1863) を上海で出版する。今回用いた資料は1863年に旧約聖書と併せて刊行された版である。彼らは訳語の問題によって、メドハーストライギリス人宣教師達と袂を分かち、別に独自の漢訳聖書を作った<sup>7)</sup>。そういうわけで、この版で注目すべき訳語は以下のものである。

主之使者臨之、主之榮光環照之

(ルカ 2 : 9) 下線引用者

ここで、たった一箇所ながら、「榮光」の訳語がはじめて登場する。さらに表1の1863年版『新約全書』(ブリッジマン・カルバートソン訳)を見ると分かるように、「榮華」の訳語が1858年のベッテルハイム訳とは違って、人間的な意味に限って用いられており、明らかに他と区別している点が挙げられる。中国においてはメドハーストを中心としたイギリス人訳の聖書に定訳の地位を奪われたが、日本においてはヘボン (James Curtis Hepburn NP 1815~1911) が日本語訳に際して参考に使っていたという事実からもうかがえるように、この漢訳の『新約全書』は日本語訳に大きな影響を与えることになる。

次の資料は1871年に横浜で刊行された、禁教下の日本における最初の聖書出版で、ゴープル (Jonathan Goble, ABF, 1827~1898) 訳の『摩太福音書』である。原典のギリシャ語が口語体であることに準じて、和訳も表音にもとづき、平仮名を用いた口語体でまとめられている。ヘボンとは異なり、漢文訳の影響はそれほど見られず独自の訳を貫いた。この聖書の訳語は「えいぐわ」「さかへ」のように漢字を平仮名にただけで、新たに作られた訳語は発見できなかった。なお、彼は四福音書と「使徒行伝」も翻訳したらしいが、

その稿本の存在確認されていない<sup>(8)</sup>。

次に、邦訳聖書における重要人物ヘボンの訳が現われる。ヘボンは現在ではローマ字のヘボン式でその名を知られる人物だが、彼はアメリカ長老教会外国伝道局の宣教師として、布教を目的に開国と同時に日本へ渡ってきた。表1に載っている『新約聖書馬可伝』、『新約聖書約翰伝』は1872年に、『新約聖書馬太伝』が1873年に出版された。それはやがて行われる日本での共同訳に備えて、ブラウン (Samuel Robbins Brown, RCA 1810~1880) と共に訳したと思われる。ヘボンは聖書のその他の部分も翻訳していたが、それは個人訳とし出版することなく、キリスト教各会派の合意のもとに聖書の邦訳を作る、という主旨で継承された翻訳委員社中へと委ねた。

このヘボンに続いて、ベッテルハイムによる1873年刊行の『約翰伝福音書』、『路加伝福音書』が刊行される。この版は、彼が1858年に琉球において完成させた『路加伝福音書』の改訂版である。彼は1858年に訳したものが正式な日本語ではなく、琉球方言であることに気づき、改訂を重ねることになる。彼は自ら修正をして原稿を仕上げるが1870年に他界する。彼の死後、未亡人が未刊の稿本をイギリス聖書教会に出版要請を出し、同協会はプッツマイヤー (August S. Pfitzmaier) に委嘱して刊行される運びとなった。それが表1の1873年刊行本である。本文は平仮名中心で訳語は「さかへ」「えいぐわ」で大体統一されている。

そして、翻訳委員社中訳<sup>(9)</sup>の聖書が1875~1880年にかけて分冊で出版され、完成の年に『新約全書』として出版された。1879年の社中訳『新約全書』で「榮光」が初めて登場するが、この本は訓点つきの漢文で、表1を見ても分かるとおり、訳語がブリッジマン・カルバートソンの『新約全書』とまったく同じで、「ルカ伝」(2:9)の訳が共に「榮光」となっている。さらに、「榮華」も人間的な意味に限って使われている。さらに、その一年後の1880年版では、表1を見ても分かるとおり、「榮光」の訳語が全体にわたって使われている。この事実から推測できることは、委員それぞれの個人訳をひとまず棚上げにし、漢訳聖書を手本として和訳を作るということで妥協が成立したということである。そして、どの漢訳聖書を使うかということでは、中国の定

訳であるメドハースト版を使わずに、同じアメリカ人であるブリッジマン・カルバートソンが訳した版を用いたということではないだろうか。翻訳委員社中の中で何らかの合意が出来上がったということが推察できる。

ここまで見てきて言えることを簡単にまとめると以下のようになる。まず、1813年の中国におけるモリソン訳『新遺詔書』が登場する。これを起源として、以後の改訂版が二つに分かれする。一つはメドハーストによって改められ1850年の『新約全書』となり、もう一つはブリッジマン・カルバートソンによる1863年の『新約全書』である。前者のメドハースト版を参考にした邦訳はベッテルハイムの1858年の『路加伝福音書』であり、ブリッジマン版を参考にした邦訳は、ヘボンなどのアメリカ人を中心とした翻訳委員社中の1880年『新約全書』である。メドハースト版は中国において定訳となり、一方で日本においてはブリッジマン版を翻訳したものが定訳となったのである。そういうわけで、この選択が「栄光」という訳語がその後“glory”の主な訳語となる選択となった。

### 3. 英和辞典における訳語「栄光」の検証

表1では1863年のブリッジマン・カルバートソン『新約全書』で初めて「栄光」が登場し、続いて1879年の社中訳『新約全書』に一部登場し、1880年には広く使われるという流れが見て取れる。ここでは当時の英和辞典も参考にして、その後の訳語の定着を見ていく。以下に挙げる表は年代順に聖書の和訳と同時代の英和・和英辞典を並べ、主要な訳語と「栄光」有無を記載した。

表2

年	タイトル・訳者／編者	主な訳語	栄光の有無
1813	『新遺詔書』モリソン	榮	×
1837	『約翰福音之伝』ギュツラフ	クライ	×
1858	『路加伝福音書』ベッテルハイム	榮華	×

1863	『新約全書』ブリッジマン・カルバートソン	榮	○
1867	『和英語林集成』初版 ヘボン	yeiyō	×
1871	『摩太福音書』コーブル	えいぐわ	×
1872	『新約聖書馬可伝』ヘボン	光明	×
1872	『新約聖書約翰伝』ヘボン	榮 (たっと) き	×
1872	『和英語林集成』第二版 ヘボン	yeiyō	×
1873	『路加伝福音書』ベッテルハイム	えいぐわ	×
1873	『約翰伝福音書』ベッテルハイム	さかへ	×
1873	『新約聖書馬太伝』ヘボン	光明	×
1873	附音挿図和英字彙 柴田昌吉・子安 峻	榮譽	×
1876	<i>AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF The Spoken Language</i> E. Satow	ikō	×
1877	『新約聖書約翰伝』社中訳北英国	榮 (さかえ)	×
1879	『新約全書』社中訳 米国聖書	榮	○
1880	『新約全書』社中訳 米国聖書	榮光	○
1884	明治英和字典 尺 振八	大名	×
1885	英和雙解字典 棚橋一郎	名聲	○
1886	『和英語林集成』第三版 ヘボン	Eiyō	○
1887	附音挿図和譯英字彙 島田 豊	頌讚	○
1888	『新約聖書馬太伝』社中訳 北英国	榮光	○
1888	ウェブスター氏新刊大辞書和譯字彙 F. L. Eastlake	名聲	×
1931	大英和辞典 市河三喜	光榮	○

表2を見ると、「榮光」という訳語が登場して、それが使われるようになった時期がわかる。つまり、辞書においても、1879年の社中訳『新約全書』以降

に「榮光」が出てくるのだ。ここで重要な辞書はヘボンが聖書和訳のために編集した『和英語林集成』であろう。なぜなら、この辞書は3回改訂されており、それぞれ、1867, 1872, 1886年刊行となっていて、版を重ねるごとに収録語彙が増加している。表2を見るとわかるように、1880年以前の辞書はヘボンの影響を受けているようで、訳語も「榮譽」とか「光明」といったヘボンに特徴的な訳語が見つかる。

1880年以降の辞書については、1931年『大英和辞典』を除いて、訳語がそれぞれの辞書によって異なっている場合が多い。訳語を表3にまとめてみた。

表3

年	タイトル	編者	出版社	“glory”の意味
1884	明治英和字典	尺 振八	六合館	大名・高譽・倨傲・高慢・尊貴・上帝の存在・神光（神ナドノ頭或ハ全身ヲ纏ウ光輪）[?]
1885	英和雙解字典	棚橋一郎	丸善	名聲・譽・榮譽・榮光・榮華・光明・天幸・誇耀・後光
1886	『和英語林集成』第三版	ヘボン		Eiyō, kagayaki, hikari, homare, sakaye, ekō, kōmiyō, go-ko
1887	附音挿図和譯英字彙	島田 豊	大倉書店	頌讚・名譽・榮光・名聲・倨傲・高慢・尊貴・上帝の存在・神光（神ナドノ頭或ハ全身ヲ纏ウ光輪）[?]・後光（神像等ノ背後ニアル）
1888	ウェブスター氏新刊大辞書和譯字彙	F.W. Eastlake・棚橋一郎	三省堂	名聲・贊美・榮譽・榮華・光明・天幸・誇耀・倨傲・天ノ上帝ノ存在[?]・後光[神像ノ背ニ付シタル]

表3に載せた訳語の中で現在の「榮光」に相当すると思われる部分は『明治英和字典』では「上帝の存在・神光」、『英和雙解字典』では「光明・天幸・後光」、『和英語林集成』ではローマ字表記で“sakaye, ekō, kōmiyō, go-ko”, 『附音挿図和譯英字彙』では「上帝の存在・神光 後光」、『ウェブスター氏新刊大辞書和譯字彙』では「光明・天幸 天ノ上帝ノ存在・後光」となっている。この訳語を見て以下のことが推測できる。

まず、ヘボン訳の影響で、「光明」「榮譽」といった訳語はヘボンの聖書訳や『和英語林集成』に特徴的な言葉である。辞書の編纂にヘボンが果たした役割の大きさをここに垣間見ることが出来る。彼が1888年の第三版で「栄光」を「光明」「榮譽」と同列に扱っているのは、彼が「栄光」という訳語にいささか不服であったか、もしくは、まだ完全に訳語が固定していなかったからかもしれない。

1931年の『英和大辞典』（市河三喜編 富山房）では、一番目には「人間的な功名」や「榮譽」を意味するとして「光荣」の訳語が出ている。この訳語も出所のはっきりとしない単語だが、“glory”を説明するという観点からは、訳語を分けるということは誠実な態度といえる。宗教的な意味の「栄光」は四番目に出ており、「神に捧げる賛美『榮光』・神の威光『榮光』」という風にきちんと説明がなされている。

ここまでのところ、訳語「栄光」を採用し定着させたのは翻訳委員社中のメンバーによる合意であるといわざるをえない。訳語の出所であるブリッジマン・カルバートソンの漢訳聖書においても「栄光」は、それほど多く用いられることのない単語であったからだ。しかし、日本において、現在に至るまでこれほど多く用いられるようになったという事実は、不思議なめぐり合わせとしかいいようがない。資料の制約もあってなかなか思うような結果が得られなかったが、同じような例はまだまだあるように思われる。

## まとめ

「栄光」という言葉は、元々日本にない事柄を表わすために、寄せ集めで作られた言葉である。それは明治時代に新約聖書を日本語に翻訳するために、宣教師によって、様々な苦勞の末に、急遽作られたキリスト教のための述語とっていいだろう。そういうわけで、“glory”にはいろんな意味があり、それに対応する日本語の訳語もいろいろあるが、「栄光」という訳語の場合はキリスト教の教義に深くかかわる意味となる。ところが、もともとキリスト教という日本には馴染みのないもののための述語として訳されたにもかかわら

ず、さらに、キリスト教が根付いたわけでもない現在の日本で、その述語である「栄光」だけが本来の守備範囲を離れ、一人歩きしているように思われる。

「栄光」に限らず、今の日本語にはよく、意味は曖昧だがよく使われる言葉というのが存在する。それは特に、幕末から明治にかけて翻訳されることで、初めて生まれた言葉の中に多い。翻訳に際して、対象が実際に目に見える物であれば、説明または理解も比較的簡単であるが、それがあつた種の場合、翻訳によって説明または理解しようにも大きな困難を伴うことは容易に想像できる。確かに、明治期の翻訳は急速な日本の近代化に必要な仕事であつた。しかし、咀嚼不十分のまま外見だけ存在する言葉を現在に残してしまつたといえないだろうか。

漢字や仏教といった多くの外国文化を受け入れてきた日本であるが、西洋文化の受け入れというのは、そんな日本において現在直面している問題であるといえよう。しかし、そんな受容の過程に日本という国の真の文化の姿があるような気もしてくる。幕末から明治にかけて、西洋と日本の文化の最初の出逢いを丹念に振り返ることで、現在において、見分けの付きにくくなつた西洋の文化と日本の文化の違いを改めて見直し、日本語の根を再確認することができるのではないだろうか。この「研究ノート」がその一端を担うことを期したい。

## 註

- (1) 今回の調査で用いた漢・和訳聖書はすべて復刻版で『幕末邦訳聖書集成全28巻』1999と『近代邦訳聖書集成全15巻』1996を用いた。
- (2) 新村 出、柊源一校注『吉利支丹文学集2』78頁
- (3) 同上、48頁
- (4) この漢訳聖書の以前にも不完全ながら『四史攸編』“Evangelia qatuor Sinicé”という漢訳の聖書が存在していた。これは漢訳聖書の必要性を訴えていたモズリーが、大英博物館で発見したものである。これは1737年に写されたものであると付記されている。(村岡典嗣著『日本思想史研究』岡書院、1930. 459頁、海老沢有道著『日本の聖書』講談社学術文庫、1989. 100頁)
- (5) 中国におけるキリスト教の伝来は、七世紀の景教(ネストリウス派)十六、七

世紀のエズイト教（イエズス会）、そして、十九世紀の新教（プロテスタント）という順序で入ってくる。景教は後に与える影響はほとんど無いが、十六七世紀のエズイトは多少の影響を残している。しかし、日本と同様にカトリック宣教師達は聖書の翻訳には積極的ではなく、部分的に訳した程度である。聖書の漢訳という事業に本格的に取り組んだのは、中国においてもイギリスまたはアメリカからやって来たプロテスタント系の宣教師であった。この点は日本の場合と同様である。

(6) 海老沢, 1989, 132頁

(7) 村岡, 1930, 477頁, 海老沢1989, 103頁, 特に問題だったのは“Theos”と“Pneuma”の訳であり, イギリス人側は前者を「上帝」, 後者を「神」とし, 定訳ではこれが採用されたが, アメリカ人宣教師は前者を「神」, 後者を「霊」としたかった。

(8) 海老沢, 1989, 166頁

(9) 海老沢, 1989, 218頁, 翻訳委員社中訳は1872年に, 各会派共通の聖書作成を目指し, ヘボン, ブラウン, グリーン(D.C. Green)を中心に, マクレイ(R.S. Maclay, MEFB), ブラウン(Nathan Brown, ABF), パイパー(John Piper, CMS), ライト(William B Wright, SPG)の各会派を代表する外国人宣教師達と, 日本人協力者, 奥野昌綱・松山高吉・高橋五郎・三輪義方らによって結成された。

※本稿は, 佐野正己教授(神奈川大学大学院)の指導による「文献研究」において提出したレポートに加筆訂正を施したものである。

## 辞書

F.W. Eastlake, 棚橋一郎編『ウェブスター氏新刊大辞書和譯字彙』三省堂, 1888 : ゆまに書房, 1995

市河三喜編『大英和辞典』富山房, 1931

E.M. Satow, 石橋政方編 *AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF The Spoken Language* 1876 : ゆまに書房, 1995

柴田昌吉, 子安峻編『附音挿図和英字彙』日就社, 1873

島田 豊編『附音挿図和譯英字彙』大倉書店, 1887 : ゆまに書房, 1995

尺 振八編『明治英和字典』六合館, 1884 : ゆまに書房, 1995

棚橋一郎編『英和雙解字典』丸善, 1885

J.C. ヘボン編『和英語林集成』上海印刷, 1867 : 北辰, 1966

————『和英語林集成 再版』1872 : 東洋文庫, 1970

————『和英語林集成 第三版』丸善商社, 1886 : 講談社, 1974

## 聖書

『近代邦訳聖書集成 1, 3, 12~15』 ゆまに書房, 1996



『幕末邦訳聖書集成13, 14, 17~20, 26, 27』 ゆまに書房, 1999

## 参考文献

- 海老沢有道著『日本キリシタン史』塙書房, 1966  
 ———『日本の聖書』講談社学術文庫, 1989  
*The Oxford English Dictionary*. 2<sup>nd</sup> ed. CD-ROM. Oxford: Oxford UP, 1994  
 亀井俊介, 川本皓嗣編『アメリカ名詩選』岩波文庫, 1993  
 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジアにおけるキリスト教比較年表』創文社, 1983  
 小島義郎著『英語辞書の変遷』研究社, 1999  
 斎藤 毅著『明治の言葉』講談社, 1977  
 新村 出『日本吉利支丹文化史』地人書館, 1941  
 ———『南蛮更紗』東洋文庫, 1995  
 新村 出, 柊源一校注『吉利支丹文学集1, 2』東洋文庫, 1993  
 Thomas Nelson Publishers, ed. *The Complete Concordance to The Bible, New King James Version*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1983  
 馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社, 1971  
 村岡典嗣編『吉利支丹文学抄』改造社, 1927  
 ———著『日本思想史研究』岡書院, 1930  
 柳父章著『翻訳語成立事情』岩波新書, 1982  
 X. レオン デュフル編『聖書思想字典』三省堂, 1973  
 和辻哲郎『鎖国』筑摩書房, 1964